

二年前の六月二十七日。それは、忘れる事のできない水害の日である。その日は、追分だけで七人という、とうとい人命と多くの田畑を一分たらずの間に、田沢川の水に、うばわれてしまった。T 君方のおいさんとおばさんも近所の人達と一緒に、田んぼにいて流されてしまった。さいわい、おばさんはうまく波に乗って、土手に流れつき助かったが、おいさんはその犠牲者になってしまった。

一夜明けた次の朝、T 君は、ゆううつそうな顔で田沢川をながめていた。その顔には、おとうさんと多くの田畑を失った悲しみと、それをうばった田沢川への怒りがはつきり感じられた。その顔を見てぼくは、T 君は、これから、今までのように元気よく遊べないのではないだろうか、心配だった。しかし、大島のお医者さんに入院している、おばさんがよくなってきたという、知らせが入るたびに、T 君の悲しみもだんだんやわらいでいくように思えた。

一学期の学校の作文発表会のとき、T 君は、「水害の思い出」という題で作文を読んだ。その顔には、また水害の次の日のような悲しみと不安が感じられた。そのころの T 君は、悲しみと不安で、エンピツもろくに手につかないようだった。

しかし、夏休みも終るころから、T 君も落ち着きを取りもどしてきて、二人の弟をはげましながら、お姉さんの手伝いをしだした。その姿を見るたびに、ぼくは、「えらいなあ」と思った。そのころ、おばさんも退院して、T 君の顔にも明るさと希望がよみがえってきた。それをみて、ぼくは、今までの不安もなくなってきた。

あれから二年。今では、T 君も、あの苦しみからぬけだして、ぼくらと共に勉強に、遊びに元気よくとびまわっている。

(三十八年)